

令和5年度 人権作文集

人権の芽

こどものいのちと人権を守り 豊かな心を育てよう

第56集

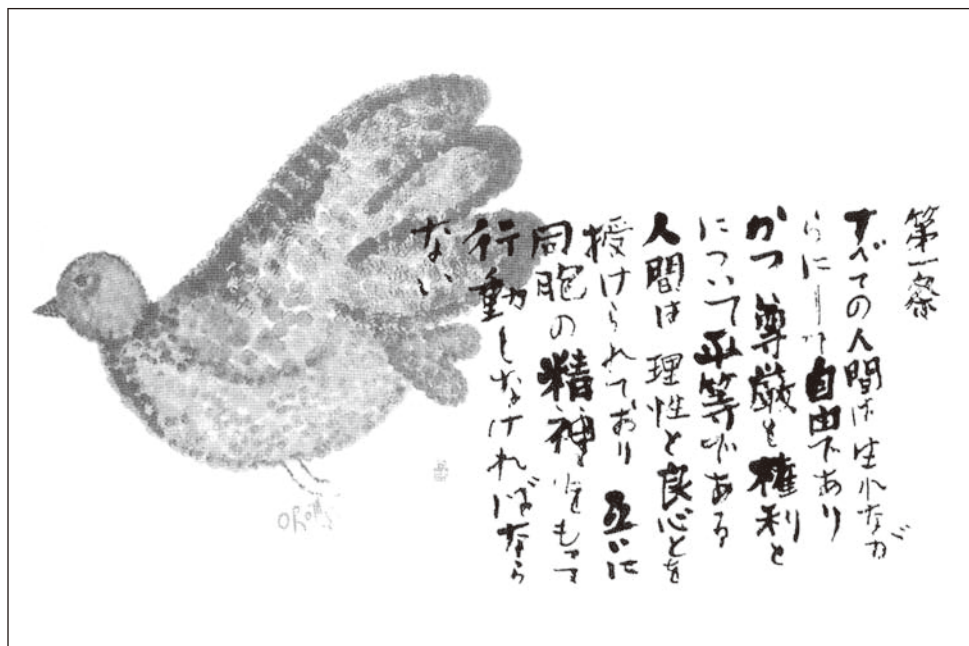


人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」



人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」

神戸地方法務局 兵庫県人権擁護委員連合会



世界人権宣言啓発書画

「鳥」 「自由と解放」を表わしたもの

書 小 木 太 法
画 オ タ ビ オ ・ ロ ス

世界人権宣言とは…

（一九四八年十二月十日
国際連合第三回総会において採択）

第二次世界大戦は、五、六〇〇万人を超える犠牲者を出した悲惨な戦争でした。

この厳粛な経験から、二度と戦争を起こさないためには、全世界で基本的人権が確立されなければならない、ということが理解されました。

そこで、世界各国の人々及び国が達成すべき基本的人権の基準を宣言したのが、「世界人権宣言」です。

世界人権宣言の基本にあるのは、全ての人間は生まれながらにして自由であり平等である、という理念です。

そして、基本的人権は、いかなる差別を受けることなく享有できなければならない、と宣言しています。

全国中学生人権作文コンテスト 兵庫県大会表彰式

と き：令和5年12月16日

ところ：兵庫県学校厚生会館



人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」



人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」



こどもの人権SOSミニレター

神戸地方法務局と兵庫県人権擁護委員連合会では、返信用封筒と便せんを一体化した「こどもの人権SOSミニレター」を兵庫県内のすべての小・中学生のみなさんに配布しています。

身近な人にも相談できずにいるみなさんの悩みごとを、このレターに書いて教えてください。人権問題に詳しい人権擁護委員がいつしよに考えて、悩んでいるみなさんの力になります。もちろん相談内容や個人情報などの秘密は守ります。

また、「こどもの人権SOSミニレター」のほかに、電話「こどもの人権110番」やメール「こどもの人権SOS-eメール」で相談することもできます。



小学生用



中学生用



は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

「人権作文コンテスト」は、次代を担う中学生が、人権に関する作文を書くことを通して、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身に付けることを目的としています。本年度の兵庫県大会は、県内三一六校から八万五八四一編もの多数の応募をいただきました。いずれの応募作品も、家庭、学校又は地域での体験や見聞を通じて、人権に関する様々な問題を真剣に考えたことが、生徒自身の素直な言葉で表現されています。それらの作品からは、人を思いやる心や優しさにあふれた気持ちを感ずることができます。

本作文集には、数次の審査を経て選ばれた作文一六編を収録していますので、一人でも多くの方々にお読みいただき、人権尊重の輪がより一層広がっていくことを願ってやみません。

終わりに、このコンテストを実施するに当たり、熱意を持って取り組んでいただいた中学生の皆さん、そして、御指導、御支援をいただいた各中学校・特別支援学校・各市町教育委員会・兵庫県教育委員会・NHK神戸放送局・サンテレビジョン・ラジオ関西・阪神タイガース・楽天ヴィッセル神戸・コベルコ神戸スティー

ラーズ・神戸ストークスの皆様方、共催いただいた神戸新聞社の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和六年二月

神戸地方務局長 柳川 謙二
兵庫県人権擁護委員会会長 工藤 涼二

目次

【審査の感想】

若い感性は社会の宝

兵庫県大会審査員長 神戸新聞社編集局報道部長 小森 準 平

【作文の部】

最優秀賞

相手と自分、両者を守る……………加西市立泉中学校

三年 小篠 誌 織……………1

思いやりの大切さ……………加古郡播磨町立播磨中学校

一年 近 清 柚 月……………4

ヘルプマークでつながる社会……………明石市立大久保北中学校

二年 新 田 歌 菜……………7

これから生きていく僕たちの世界……………姫路市立神南中学校

三年 小 林 奏 心……………10

知ること……………新温泉町立夢が丘中学校

三年 川 元 桃 花……………13

兵庫県教育委員会賞

「思いやりの心」と「みる力」……………猪名川町立清陵中学校

一年 三 村 真 央……………16

NHK神戸放送局賞

僕は100点じゃない……………尼崎市立塚口中学校

二年 圓 谷 大 翔……………19

サンテレビ賞

言葉で思いやる社会に……………西宮市立上ヶ原中学校

三年 川 口 真 穂……………22

ラジオ関西賞

無意識の決めつけ……………加古川市立平岡中学校

三年 藤本愛姫……………25

兵庫男女共同参画委員会賞

先輩はLGBT……………仁川学院中学校

三年 酒村尚宗……………29

兵庫こども人権委員会賞

明石駅のホームで会った介助犬とあなたへ…明石市立高丘中学校

二年 森 明咲子……………32

兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞

老若男女 社会の一員として……………西宮市立瓦木中学校

三年 星川百寧……………35

優秀賞

「私の暮らし」……………丹波市立青垣中学校

三年 野田 姫華……………38

弟から学んだこと……………近畿大学附属豊岡中学校

一年 辻井透真……………41

人権の正しい在り方……………尼崎市立立花中学校

二年 堀岡青矢……………44

多くの障がいと友達……………洲本市立洲浜中学校

一年 堂内涉夢……………46

奨励賞一覧……………48

審査の感想



〈審査員〉兵 庫 県 教 育 長

NHK神戸放送局コンテンツセンター長

サンテレビジョン地域情報局報道制作センター社会報道部長

ラジオ関西コンテンツ局コンテンツ・ニュース部長

神戸新聞社編集局報道部長

兵庫県人権擁護委員連合会長

兵庫男女共同参画委員会委員長

兵庫こども人権委員会委員長

兵庫高齢者・障がい者人権委員会委員長

神戸地方 法 務 局 長

(順不同)

若い感性は社会の宝

兵庫県大会審査員長

神戸新聞社編集局報道部長

小 森 準 平

皆さんの作文を読ませていただく前に、神戸新聞の記事に「人権」というキーワードがどれぐらい出てくるのか調べてみました。すると、例えば今年11月の1カ月間で80回ほど、1年間では千回を超えていました。人権啓発講座といった催しの告知などもありましたが、ウクライナやパレスチナ自治区ガザで人命が次々に失われている痛ましいニュースや、交流サイト（SNS）への差別的な書き込みなど、さまざまな場所や方法で人権が侵害されている実態が連日、報じられていました。

すべての人が生まれながら平等に持っているはずの「人権」が、きちんと大事にされるにはどうすればいいのか。それを考える時、これからの社会を担う若い皆さんが身の回りにある人権の問題に目を向けることは、大きな意味を持っています。今年も8万5千点を超える作文が寄せられましたが、審査する私たちに気づきを与えてくれる内容も数多く含まれていました。

小篠誌織さんは、特別養子縁組で親子となった母親とのことを周囲に伝えた際の体験から書き始めました。無理解から発せられる言葉に傷つきながらも前を向き、他人との関係について「相手の人権を守ることが自分の人権を守ることでもある」と普遍的な結論にたどり着いています。

近清柚月さんが取り上げた体験は、小学生の頃に一人で乗った電車内での出来事です。耳が聞こえず、手も不自由なおばあさんがハンカチを落とし、それを拾ってあげたことから始まった交流が生き生きと描かれ、困っている人に勇気を出して手を差し伸べることの大切さを学んでいます。

心臓の病気がある新田歌菜さんは、自分と同じくヘルプマークを付けている人を見かけたことから、外見では分かりにくい障害のある人の不安などに触れています。そしてこのマークがもっと役立つ方法などを提案し、誰もがヘルプを出せて、それを助けてくれる人がいる未来を思い描きます。

小林奏心さんは中学校の制服を通じ、ジェンダーの問題を考えました。一昔前には当たり前だった性別による決めつけに異を唱え、他人を思い込みの「型」や「印象の壁」にはめ込むことの危険性に言及しています。「性とは一番目に見えて、一番目に見えにくい」との指摘にうなずきました。

ハンセン病への差別に苦しんだ元患者の人生を取り上げたテレビ番組を見た川元桃花さんは、無知の怖さを掘り下げました。患者を苦しめたのは「病気そのものよりも世間だと思う」と本質を見極め、真実を正しく知ることや認識の誤りに気付けば改めることが、差別をなくす一歩だと主張します。

皆さんの純粋で柔軟な感性は社会の宝物です。今回の作文で書いてくれたように、おかしいと感じたことは「おかしい」と声を上げ続けてください。一人一人の声は小さくても、それが「人権」を守る大きな力になるはずです。

作文の部



相手と自分、両者を守る

加西市立泉中学校 三年

小 篠 誌 織

「じゃあ、本当のお母さんじゃないってことなの」。私が、私自身のことについて友達に伝えると、大抵、このような言葉が一番初めに返ってきます。その度に、私は体の熱が一気に冷めるような気持ちになります。養子縁組という言葉は、多くの人が聞いたことがあると思います。養子縁組とは、血縁関係のない人の間に法的に親子関係を持つことです。婿養子などという言葉なら、聞いたことがあるはずです。私は、普通養子縁組ではなく「特別養子縁組」という制度で、産まれてすぐに今の両親に迎えられました。特別養子縁組は、産みの親との法的な親子関係を解消し、新しい両親と戸籍上、実の親子関係を結ぶことです。

私を産んでくれた母は体が弱く、シングルマザーでもあったようです。私を育てたくても、育てられる状況ではありませんでした。私がまだ幼い頃、母からそのことを聞きました。当時の私はそれほど深く理解しておらず、「私にはお母さんが二人いるんだな」というような軽い解釈をしていました。

私が小学校三年生の頃でしょうか。私は友達に初めてそのことを伝えました。すると友達は、「じゃあ、今のお母さんは本当のお母さんじゃないの」と言うのです。私は頭の中が真っ白になり、上手く答えられな

かったのを覚えています。また別の子には「産んでくれたお母さんに捨てられた」という言葉を受けました。そのとき、私はショックを受けました。今となつては、相手に悪気はなく、深く考えて言つた言葉ではないことは分かりますが、当時は、

「なんで養子に出されたんだろう。私はいらぬ子だったのかな」と深く悩み、悲しく苦しい気持ちでした。それから何日か経ち、私は母に特別養子縁組について尋ねました。そこで初めて、私を養子に出したのは、産んでくれた母が、私にできる精一杯の愛だったと分かりました。幸せな環境で育つてほしいという、母の想いだったのです。それを知って、気持ちが楽になると同時に、考えが大きく変わりました。

母と、産んでくれたもう一人の母。どちらも私にとっての「本当のお母さん」であり、私を想ってくれる大切な存在です。

今、私は小学校からずっと一緒にいる友達には、そのことを伝えていきます。全員が理解してくれていて、今では、共に遊び学べる仲間です。一方で、中学校になつて新しくできた友達には、このことを言うことができいません。一度話をしかけたとき、やはり、「本当のお母さんじゃないんだ」と言われ、その瞬間に上手く答えることができませんでした。

そんなとき、私を支えてくれた言葉が「無理に言わなくてもいい」というものでした。すべてを今言う必要はなく、自分が傷つかないよう心を守る手段として、「言わない選択」があるのです。自分自身に強制するのではなく、本当に伝えたい、と思つたタイミングで、上手く伝えられなくてもいいから、少しずつ理解してもらるように努力していくのです。

私は、小さい頃からずっと、特別養子縁組というものが、どういうものなのか考えてきました。私には母

が二人いる。母も、私を産んでくれた母も、本当のお母さんで、私を愛してくれています。特別養子縁組というものにとっても悩むこともありました。しかし、今では私にとつての誇りでもあるのです。私には、私を大切にしてくれる二人の母がいるのですから。

「人権を守る」これは、相手の人権を守ること。そして、自分自身の人権を守ることでもあるのではないのでしょうか。相手のことを知って、色々な方向から見ても、自分で考えて理解する。これが、相手の人権を守ることだと考えます。そして、自分自身について伝え、時には無理に言わずに、タイミングを計ったり、相手に少しでも自分について理解してもらるように自分なりに努める。これが、自分自身の人権を守ることです。

私は、相手と自分、両方を守る人間になりたいです。人は、平面的な存在ではありません。必ず立体であり、それが球体であるか、立方体であるか、角錐であるか、または円柱か八面体か、人それぞれです。それらを人が勝手に決めつけたり、一方の面から平面的に捉えることが、相手を傷つけることにつながるのだと思います。だから、相手を守るには、様々な方向から見ても形を捉え、理解する必要があるのだと思います。また、自分自身の形を理解して、相手にも理解してもらるように工夫することが、自分自身を守ることにつながるのではないのでしょうか。

相手と自分を守るために、私は一步を踏み出しました。私の一步が、誰かの一步につながることを信じています。

兵庫県大会最優秀賞

思いやりの大切さ

加古郡播磨町立播磨中学校 一年

近 清 柚 月

これは私が小学生の頃実際に体験したお話です。学校が休みの日に、高砂にあるおじいちゃんの家に行ってみようとお母さんと話していました。我が家の交通手段はほとんど車で、電車に乗る機会が少なく、私は切符の買い方もわからないので、お母さんが

「それでは困るから、最寄り駅までおじいちゃんに迎えに来てもらうから、そこまで一人で頑張ってみようか」

と言い一人で行くことになったのです。その電車の中での出来事です。

切符を買い電車に乗り、とても順調だと思っていた矢先、一人のおばあちゃんが途中で電車に乗って来ました。そのおばあちゃんの首には

「私は耳が聞こえないので助けて下さい」

と書いたプラカードがかかっていました。私はそれを見て、

「耳が聞こえへんのに一人で電車に乗ってすごいなあ」

と思いました。そのおばあさんが座席に座った時にハンカチを落しました。それに気づいた私はすぐにおばあさんにハンカチを渡そうとしました。

「すみません、ハンカチ落としましたよ」

と声をかけましたが、すぐに、そうだ。このおばあさんは耳が聞こえなかったんだってと気がつき、肩をポンポンとたたき、ハンカチを見せました。すると、そのおばあさんは突然かばんをたたき始めたのです。私はどうしたらいいのかわからなかったし、おばあさんを怒らせてしまったのかとすごく怖くなりました。周りの人に助けて欲しくて、あたりを見回しても、誰一人、私と目を合わせてはくれませんでした。すると、おばあさんは泣き出してしまいました。泣きたいのは私の方だと思いながら、必死でどうしたらいいのか考えました。その時、ふと目に入ったおばあさんの指が強くにぎられていて、手も不自由なのではないかと気がつきました。おばあさんは、自分のかばんをたたいていたので、かばんの中にある何かを取りたいのかと考え、

「かばんの中身ですか？」

「開けてもいいですか？」

と話しかけながら、かばんの中を見るとひらがな表が入っていました。それを出すと、おばあさんは一文字ずつこぶしで押されていきました。

「あ・り・が・と・う」

と。私の目は涙でいっぱいになりました。この言葉を私に伝えたかったんだ。おばあさんの伝えたい事がわかってよかった。ホッとして、気持ちが落ち着いていた私は、その後おばあさんとひらがな表を使って会話

をしました。おばあさんが私と同じ駅で降りる事、その駅で娘さんが待っている事、その後娘さんと家族とみんなでご飯を食べる事を教えてもらいました。無事に私達二人が降りる駅に着き、ホームには娘さんもいて、そのおばあさんともさよならしました。私のおじいちゃんも待っていてくれて、おじいちゃんの顔を見たら人目も気にせず泣いてしまいました。この話をする時、おじいちゃんは私をギュッと抱きしめて、

「すごかったな。えらかったな。一人でよう頑張ったな」

と言つてほめてくれました。ほんの少しの時間だったけど、何十分にも感じました。

色々な事があつたけどこの体験を通して、私は困っている人がいたら必ず声をかけて、私に手伝える事があるか聞いてみる事の大切さを改めて感じました。おばあさんが泣き出してしまった時は、ハンカチなんて拾わなければよかったと後悔もしましたが、最後まであきらめずにどうすればいいのか考えて、行動が出来たし、今の私に出来る精一杯の事が出来たと思います。もし今後耳の聞こえない方に出会っても、この体験のおかげで、もう少し落ち着いて相手の方の言いたい事をわかってあげられると思うし、何をして欲しいのかくみとれると思います。反対に私の様に困っている人がいても、進んで声をかけ、その人と一緒に悩み、考える事も出来ると思います。

兵庫県大会最優秀賞

ヘルプマークでつながる社会

明石市立大久保北中学校 二年

新田 歌菜

あつ、あの人もヘルプマークをつけている。急いでバス停に向かう人のリュックに、私と同じヘルプマークが揺れていました。私はその時、困難を抱えているのは自分だけじゃないんだ、と思う気持ちと、どんな不安や困り事があるのか、どんな援助や配慮が必要なのかをずっと考えていました。

私には心臓の病気があり、電車やバスに乗っているときに、重い荷物も持てず、立っていられなくて調子が悪くなることはありませんでした。それにペースメーカーも入れているので電磁干渉を受けると不整脈やめまいが起きる事があり、満員電車では携帯電話やカバンなどの磁石が付いているものなどが怖くて仕方ありません。

その他にも店舗や図書館など公共施設の出入り口などに設置されている電子商品監視機器や急速充電器など、どこに行っても気をつけなければいけないことがたくさんあり疲れてしまいます。いつ何が起こるか分からない不安もあり外出したくなくなることもありました。

「思いやり駐車場」と呼ばれる車椅子のマークのある駐車場に停めた時のことです。あの子歩けるのに、

なんであるそこに停めてるんだらう。そんな声が聞こえてきたり、ジロジロ見られたりすることがありました。思いやり駐車場の車椅子のマークは、世界共通のシンボルマークで、障害者が利用できる建築物・施設であることを明確に示す意味があるのですが、マーク自体が車椅子の形をしていることもあり、車椅子の人のための場所と誤解されていることが多いようです。

今はほとんどの車はスマートキーシステムが搭載されていて、アンテナ部からも定期的に電波が発信されているため、ペースメーカーを入れている人は、車の近くを歩くのにも二十二センチの間隔が必要です。そのため、間隔が広く取ってある「思いやり駐車場」に停めることもあるのですが、それを知っている人は少ないと思います。

車椅子を使用する時にも、高齢者や、肢体が不自由な方が使うものという風潮があり、自分で移動できたり立てるとなると不思議に思われることもあります。心臓病だけに限らず他の病気でも酸素飽和度が低いときには、立ち上がったり歩くと酸素が下がってしまいます。心臓や肺にも負担がかかるため、車椅子を使用しなくてはなりません。

そういった私自身の経験から、一見元氣そうでも外見からでは分かりにくい障害を持った人がいることや、そんな時どうすれば伝えられて、知ってもらえるのだろうと、ずっと思っていました。

丁度、その頃、内部障害や難病の方、義足や人工関節を使用している方、妊娠初期の方など、配慮や助けを必要としている人が身につけ、周囲に知らせることができる、ヘルプマークが出来たと知りました。

電車やバスなどの交通機関や公共施設でポスターが掲示されていたり、身につけている人を見かけるようになり、私も外出時にはつけるようになりました。もしもの事があった時に手を貸してくれる人がいるとい

う安心感がある一方で、交通機関では大抵の人は携帯電話を見ていて、つけていても気づいてもらえたことはありませんでした。私自身もしんどくても、席を譲っていただけませんか、となかなか自分から声を上げることができません。それは自分が病気だと言うのが嫌なわけでも、声をかける勇気がなく恥ずかしいからでもなく、やはり迷惑をかけているようで何だか申し訳ないと思う気持ちでいっぱいになるからです。

せっかくできたヘルプマーク。調べてみると十年程経った今でもその認知度は約六割でした。認知不足により、役に立たなかったり周囲の反応が気になるから利用していない人も多いと分かりました。また、つけている人を見た時、私が思ったようにどんな助けがいるのか、今困っているのが分かりにくいからなのかもしれません。

私はヘルプマークを身につける時、どんな事に困り、助けがいるのか、緊急時の対応の仕方などを簡単に示す必要があると思いました。私も助けてもらえばかりではなく、いつも誰かの力になりたいと思っているので、ヘルプマークをつけている人の見えない不安や知られていない困難について、もっと知る事で、今助けがいるのか、何に困っているのかを想像して声をかけることができるのではないかと思います。誤解や偏見をなくすにはまずお互いのことをよく知る、ということが大切だと思います。誰もがヘルプをだせたりそれを助けてくれる人がいる。そんなお互いの些細な悩みを話しあえるあたたかな未来を私はこのマークと共に感じています。

兵庫県大会最優秀賞

これから生きていく僕たちの世界

姫路市立神南中学校 三年

小林 奏 心

僕は、昨年の文化発表会の『新しい制服のお披露目』のコーナーで、男子の制服と女子の制服を着ました。なぜ、制服のスカートを僕がはいたのか。これは父との会話の中での言葉がきっかけとなっています。

姫路市内のある中学校で制服が新しくなり、女子のスラックスも可能になったという話題が新聞に取り上げられていました。「女子がズボンでもええなら男子もスカートでもええやんな」と記事を見た父は言いました。そのことを思い出した僕は、文化発表会の制服のお披露目で僕がスカートをはくことを先生に提案し、先生から許可をもらいはくこととなりました。僕がスカートをはくことで、伝えたかったことがいくつかあります。一つは、ジェンダーレスという考えから、選択肢は男子にも女子にも自由にあるということ、もう一つは、男子がスカートをはいてもそれはおかしくないということ。僕がスカートを実際にはいて、その後のまわりの友達の反応は「お前がはいたら面白いわ」などでした。笑われたり茶化されたりすることはいくらかはあると予想していましたが、なんだか上手く伝わらなかったように感じ、不安になりました。それと本当にLGBTQで悩んでいる子がいたら、僕の行動は逆にその子を傷つけてしまわなかっただろう

かと思ったりもします。

最近テレビで、色んな場面の絵とセリフが流れるけれど声は聞こえず、最後に聞こえてきたのは「聞こえてきたのは男性の声ですか？女性の声ですか？」と音声が流れるCMを見ました。学校のLGBTQの授業で『アライグマ（性が分からない）』が「リボンをつけたら？」「ピアノを弾いたら？」どの性だと思うのか？ということをしました。

CMの声やアライグマの性別も、自分の中の今までの経験から得た『印象』や『思い込み』で、「野球をするのは男性」「スカートをはくのは女性」「会社で活躍するのは男性」「育児をするのは女性」と見えてしまっている人が多いのでは無いかと思います。祖父母の代は「男の子なのだから…」「女の子なのだから…」という考え方が主流・普通と言われていた時代を生きています。両親の代も、男の子らしく、女の子らしく「男の子の色は黒と青」「女の子の色はピンクと赤」という時代、LGBTQという言葉も聞かれず、生まれた時の体の性と心の性が同じであることは当たり前で普通のことだとされた時代、男の人が女の人の格好をすることを「変わっている」と認識した時代、三十年ほど前にドラマでも『多様な性』について取り上げられるようになっていったけれど衝撃的だったと親は言います。男だから・女だから…と言われてきた時代から月日を重ね僕たちが生きている今の時代はLGBTQについても、一人一人の個性についてもずいぶん自由になり、尊重され、語り伝え、理解し、生きやすく過ごしやすいよう、日々色んなところで色んなことが考えられ広がっているように思います。

姫路市でも令和四年四月に『パートナーシップ宣誓制度』を開始したという手紙をもらいました。授業でも『多様な性』『LGBTQ』などについて勉強しています。たくさんさんの知識と情報に触れるチャンスがあ

ります。自分以外の人、家族、大切な友達、身近にいる人のことをいっぱい知っていくためにも、このチャンスは大切にしたいと思います。

色んなことを学んでいる僕だけれど、自分の中に『印象の壁』みたいなものがあって、「リボンをつけたら女子」というような思い込みになっているように思います。僕はこの『印象の壁』を壊していきたいと思っています。「こんなタイプの子はきっとこういう考え方だろう」「このタイプの子はきっとこんな行動するだろう」など、人の持っている個性も「きっとこんな感じ」と思い込んで接してしまわないようにと思っています。相手と会って、たくさん話をし、相手の考えや思いを聞いて、僕の思いを話して伝えて、そして僕は相手のことを知っていく。今の僕はそうしながら、相手を僕の思い込みの『型』や『印象の壁』の中にはめ込まず、相手の個性を知っていくようにしていきます。

僕は文化発表会でスカートをはくことで、ジェンダーフリーについて自分なりに考えるきっかけが出来ました。多様な性について知ろうとすることは一人一人の『個性』についての見方も考えるきっかけとなりました。性とは一番目に見えて、一番目に見えにくいものと感じています。個性もパッと見えるものの下にそれぞれ思いがあると感じています。

相手をよく知ろうとしないのに否定的になることはなく、しっかりと向き合って相手のことを知っていく、僕の大切な仲間を増やしていけたらいいなと考えています。

知ること

新温泉町立夢が丘中学校 三年

川 元 桃 花

「なぜ、人権侵害やいじめがなくならないのだろうか」。毎年、人権作文を書くときに私の頭に浮かぶ疑問です。学校では、先生がいじめについての話や、人権の授業をしてくださいます。地域では、人権講演会が開かれ、多くの方が参加されています。その中で私たちは、人権を尊重することの大切さや、命の尊さについて学びます。それでも、人権侵害やいじめが社会からなくなることはありません。なぜだろう…

そんなことを考えているとき、私はあるテレビ番組の特集を見ました。私はその内容を知って、涙が止まりませんでした。二人の元ハンセン病患者の方が病氣にかかってからの人生を語るといいうものでした。その話は、私の想像を絶するものだったのです。

ハンセン病は、「らい菌」という細菌に感染してかかる病氣です。「らい菌」は元々感染力が弱く、たとえ感染したとしても発病する力はとても弱い細菌です。特效薬もあり、完治する病氣です。治療をせずに放置すると、身体の変形を引き起こし、障がいが残ったりする恐れもありますが、初期に治療を開始すれば、障がいは残らないそうです。しかし、昭和四年に「無らい県運動」を各都道府県が行い、ハンセン病患者ゼロ

人を目指して、競うように患者を療養所に入所させました。昭和六年には「らい予防法」が成立し、在宅のハンセン病患者も強制的に療養所へ入所させることができるようになりました。このような国の動きから、ハンセン病が「恐ろしい伝染病」だという認識が社会に定着することになりました。それ以降、ハンセン病患者は差別や偏見に苦しむこととなります。

元ハンセン病の方の話の中に「社会を守ることが暴走する危うさ」という言葉が出てきました。ハンセン病患者が結婚する際には、条件として、二人のうちどちらかが不妊手術をするように迫られたそうです。ハンセン病にかかった子どもを産まないようにするためです。現代では、ハンセン病は感染症なので、遺伝することはないと分かっています。しかし、そのことがはつきりと分かる前は、ハンセン病患者を増やさないために、この方法がとられたと考えられます。しかし、生まれた限り、自分の子どもを残したいと思うことは当たり前のことです。これは、誰もが平等にある権利で、病気が理由でその権利を奪うことは、大変な人権侵害だと思いました。そもそも結婚を許されなかったり、進学や就職を拒まれたりすることも多くあったそうです。これらの差別は、病気が完治した後も続けられました。また、ハンセン病患者の家族も、結婚や進学、就職において差別にあったそうです。病気にかかっただけで、自分も家族も当たり前の生活ができない、人として大切に扱われないというのは納得がいきません。

もう一方の元ハンセン病患者の方は、「怖いのは社会の空気」と話しておられました。ハンセン病患者は、療養所に入るときに、自分の名前を変え、籍を抜きます。これは、家族に差別や偏見の目が向かないようにするためだったそうです。家族のために、自分の存在を消してしまうのです。家族と縁を絶ち、療養所で一生を暮らす生活がどれほど過酷だったのでしょうか。社会の間違った政策が差別を引き起こし、それが間違

いであつたと分かつた後も、家族のもとに帰れず、人々の偏見に苦しんで療養所で亡くなつていった人々のことを思うと胸が痛くなりました。

ハンセン病患者を苦しめたのは、病氣そのものよりも、世間だと私は思います。ハンセン病患者の方々のように、社会から間違つた受け止め方をされ、差別を受けている人は他にもいるのではないかと思いました。もちろん、政府やマスコミから流された情報は、本当だと信じてしまうと思います。でも、当事者の話を聞き、真実を正しく知る、誤つた認識を持つていたら、その間違いに気づき、その認識を改めることが差別をなくすことに繋がると私は思います。自分の情報や認識が正確なものなのか、自分の行動が人を傷つけていないのか、一人ひとり見つめ直してみる必要があると思います。

私自身も多くのことを学び、様々な角度から正しく知ること、人権が尊重される世の中を作る一人として成長していきたいです。

「思いやりの心」と「みる力」

猪名川町立清陵中学校 一年

三村 真央

私が六年生の冬に入会した個別塾で、ある先生との出会いがありました。その先生は自己紹介でゆつくりと次のように話してくれました。

「私は視覚障がいがあります。弱視だから教科書やノートを見る時、板書する時にちょっと変わった見方をするけど気にしないでね。」

私が視覚障がいの方と関わりをもつことは初めてのことでしたが、先生の丁寧に分かりやすく教えてくださる授業がとても楽しく、先生が弱視であるということを忘れてしまうぐらいでした。そして半年以上経った今も、その気持ちは全く変わっていません。

もう一つ私が強く感じるがあります。それは、先生は「よくみえる」ということです。先生と話をしていると、先生には私たちが気づくことができない人の心の小さな変化や奥底に隠れている本当の気持ち、物事の本質がみえてるように感じます。話をよく聴いてくれて時に私自身も気づけなかった本音を引き出してくれます。私の喜びを私以上に喜んでくれます。私は先生のおかげで苦手だった小説文の読解が好きに

なりました。それは筆者や物語の登場人物の伝えたいこと、気持ちの揺れ動きを丁寧に教えてもらったからです。

私は、「障がいを持っている人や困っている人の力になりたい。」という思いを持ってこれまで行動してきました。

でも、先生との出会いを通じて、実はサポートをしている以上に私自身が助けてもらっていること、勇気をもたらしていることに気がきました。

世間では、「障がいは個性」と言う人もいます。私はその一言で片付けてしまうことはできないと思います。でも、障がいを持っている持っていないに関わらず、私たちは一人ひとり違います。性別や生まれ育った場所、得意なこと、苦手なこと、大切にしていること。夏が好きな人もいれば冬が好きな人もいます。自分と違うことを全て理解することは簡単ではありません。では、みんなにとって生きやすい世界とは何でしょうか。

その一つの答えが、先生の持っている「みる力」なのだと思います。相手の意見を聞き、目では見ることでできない気持ちを汲み取る。相手の思いに少し歩み寄ってみる。困っている時は手を取り合ってお互いに支え合う。同じじゃなくて良い。違っても良い。ちょっとした小さな思いやり一つひとつが積み重なって大きな力になるのかも知れない、そう感じました。

そして、その思いやりの心を一回きりでなく日常の中で当たり前に持てるようになるには、まず自分自身のことをよく知り、認めることが大切だと思います。私自身を振り返ってみても、自分の心に余裕がなくなっている時は周りの人の優しい気持ちに気付けなくなってしまうことがあります。反対に、心に余裕がありリラックスをしている時は、周りの人の話をよく聞いたり、支え合いたいという気持ちが自然に生まれてきま

す。

一方通行の想いにならないためにも、自分の心の声もよく聞き、相手の想いに寄りそう。まずは私がその一歩を踏み出していききたいです。

NHK神戸放送局賞

僕は100点じゃない

尼崎市立塚口中学校 二年

圓谷大翔

ありがたいことに僕は五体満足に健康にこの世に生まれてきた。でも、中には障害を持って生まれてきたり、事故や病気で体が動かなかったり、年老いて思うように動けなかつたり、この世界中にはいろんな人がいる。

僕の周りでも、障害を持った同級生、足腰が弱った祖母、事故で体が動かなくなった知人、いろんな人がいる。そして、よく耳にする。

「〴〵さんはみんなとは違うんだから優しくしてあげて」「お年寄りは大切にね」「障害があつて大変だから助けてあげて」

どれもその通りだし、そうしたいとは思っている。だけど、少し違和感も感じる。みんなとは違つて何だろう？お年寄りだから、障害があるから特別ななんだろうか？確かにできることは制限されるかもしれないし、思うように動けない分危険も多い。でも、きっと特別ではない。

僕は、元気で健康な中学生だ。僕もできないことはたくさんあつて、食べるのが遅かつたり、字が汚かつ

たり、たまに空気が読めなかったり、滑舌が悪かったり……。でも、僕は周りの人から「あの子は字が汚いから頑張って読んであげて」とか「空気読めないけど話を合わせてあげて」とは言われてはいない。僕を知ってる周りの人は自然と僕のできない部分をくみ取ってくれて、それを補ったり助けたりしてくれる。

障害がある人はそんな僕と何が違うんだろう？ 特別だから何かをしてあげる、特別だから優しくしてあげる、特別だから……。

違う。

障害者だから特別なんじゃない。特別だからしてあげるんじゃない。障害がある人でも健康な人でも、年寄りでも、誰でも、困っていれば助ければいい。できない部分は補えばいい。その人に寄り添って優しく歩み寄ればいい。みんながそれを当たり前にできるようになれば、なにかハンデがある人が特別視されるようなことはないのではないだろうか。

みんな好きでハンデをもって生まれてきたわけではない。そのハンデは、その人の個性であり、チャームポイントになるかもしれない。それも含めてその人なのだと思う。

小学生のころ、クラスに障害を持った子がいて、僕は彼のことを大好きだった。会話をすることはできなかったけど、声をかけたり何かと一緒にしようと誘うと、彼なりの方法で反応してくれる。とても絵が上手で、にこにこしてて、彼と一緒にいると僕も楽しかった。そして、ある時彼のお母さんから「いつも優しくしてくれて、面倒見てくれてありがとうね」と言われた。でも、僕はお礼を言われるような特別なことではない。だから僕は「僕が○○くんといったら楽しいから遊んでるだけで！ お礼とかいらんで！」と答えた。そしたら彼のお母さんは泣きながら「ありがとう」と言ってくれた。まだ小学生だった僕はなんで泣く

んだらうって思ったけど、今ならわかる気がする。

特別な目で見て優しくするのと、一人の人として接して優しくするのは同じに見えるけど、受け取る方からしたら微妙に違うんだと思う。

今はまだまだハンデがある人に対して、くだからといい意味でも特別な目で見える人が多いように思う。それは必ずしも悪いことではないと思う。でもきつと受け取る側は特別なんじゃないやなくてみんなと同じ一人の人として、ハンデはその人の個性として同じように接してほしいのではないかと思う。

ハンデがあるからほかの人より特別扱いして接するのではなく、みんながハンデがある人にもない人にも、そして逆にハンデがある人も周りの人に対して、同じように優しく相手の気持ちを考えて接することが当たり前にできる世の中になったら、ハンデ自体が一つの個性として成り立ったら、ハンデという境界のない世の中になると思う。

僕は100点ではないし、世の中に100点満点の人なんかいないと思う。そのマイナス部分が障害なのか、加齢なのか、性格なのかだけの問題。いつか境界がなくなってみんなが寄り添える世の中になれたらいいなと思う。そして、当たり前になりすぎてこういう人権に関する活動がなくなっていて、どんな人でも過ごしやすい世の中になったらいいなと思う。

サンテレビ賞

言葉で思いやる社会に

西宮市立上ヶ原中学校 三年

川 口 真 穂

今や私達人間とインターネットは、生きていく上で切っても切れない関係で結ばれていると思いませんか。便利で気軽に使えるインターネットは、使い方によっては人を傷つけるものに変わってしまっています。私も軽率な言葉を文字でネット上に浴びせている人達をよく見かけ、その度に胸が痛みます。

私は先日、芸能人がネット上のひぼう中傷により、自ら命を落としてしまったというニュースをテレビで見ました。私は今までひぼう中傷を受けたことがないので、被害者の心の奥底の気持ちを本当に理解することとは難しいことだと思えますが、相手の立場に立つて考え想像することはできます。自分の身に置き換えて考えることは、簡単なことで誰もができることだと思いませんか。それなのにどうして、指先から人を苦しめる言葉の数々を打ち放つのでしょうか。また、その被害者の訃報を受け、これまでひぼう中傷をしていた人達が自身の発言を消したり、アカウントそのものを削除する人がいることを知りました。自身のひぼう中傷がフォークラスされ、批判されることを恐れたのだと思います。投稿を削除したからといって無かったことは決してできません。鋭利な言葉の束は、会ったこともない人の心を刺し、重くその人の心に残り続けます。

そして、ひぼう中傷をしていた人に対してお前のせいで亡くなった等と責める人もいたそうです。ひぼう中傷は、ひぼう中傷を呼んでしまうのだと、ひぼう中傷の繰り返しを目にしてわかりました。偏った正義感が多くの人をまたもや苦しめてしまうことを忘れないでほしいと思います。匿名であるのを良いことに無闇に人を傷つけるのは、悪質な行為で、内容によっては名誉き損罪やぶじよく罪等の犯罪に当たります。

身近なSNSといえば、ラインやインスタグラム、ツイッターなどです。たくさん情報を取り入れることができ、繋がりを深めることができるので、孤独感を解消する憩いの場になっている人もいます。私も使っていますが、その良さを打ち消してしまう程の誤った行動をしている人が多いと感じます。SNSを使う上で注意すべきことは、相手の表情が見えないことだと思います。死ねや消えろという心無い言葉を文字で見ても相手がどれくらい本気なのかはわかりません。受け手にとっては、生涯深い傷となって残ってしまうかもしれないのです。また、匿名性が高いので、受け手の気持ちに無頓着になり、言葉に対して無責任になってしまうのだと思います。

人の心を見通し、全てがわかるということは誰にもできません。しかし、人間には想像力と表現力、考える力があります。だからこそ、想像力と表現力を働かせて、投稿する前に一度踏みとどまって考え、言葉選びを慎重にすることが大切だと思います。軽はずみな言動で誰かを知らず知らずのうちに傷つけてしまっている可能性が常にあるので、人を傷つけない言動を心がけて自分がすること全てに責任を持つべきです。また、人を傷つける前に自分の傷を癒すことも大切だと思います。ひぼう中傷は、嫉妬や妬み、怒りからの自分のためのストレス発散なのではないでしょうか。だから、冷静になってから考えて自分自身の感情をコントロールすることも良いと思います。そして、膨大な情報の中から嘘で作られた情報を見抜く努力も必要だ

と思います。一人ひとりの大切な命を奪い、取り返しがつかなくなる前に立ち止まって考えることで世界中に繋がれるSNSの社会が、より豊かに明るいものになっていくことを切に願います。言葉が誰かと喜びを分かち合い、幸せを紡ぐものになってほしいと心から思います。

ラジ才関西賞

無意識の決めつけ

加古川市立平岡中学校 三年

藤 本 愛 姫

私は双子だった。だが、私の家族には、両親と6歳年上の姉しかいない。私と一緒に生まれるはずだった双子の姉妹は、母のお腹の中で死んでしまったらしい。その事実を知ったのは、小学生の頃だった。

人権作文を書くころと思った時、何を書くか正直迷った。その時に、母が昔聞かせてくれた言葉を思い出し、その事を皆に知ってもらいたいと思ったのでこのテーマで書く事に決めた。

母は、父と22歳になってすぐに結婚した。結婚は早かったが、なかなか子供を授からなかったらしい。父も母も、子供は授かりものだからとあまり気にせず、色々な所に出かけたりしながら毎日楽しんで過ごしていたそう。だが、友人や近所の人や職場の人は、

「そろそろ子供を作らないの?」

「早く孫の顔を見せて親御さんを安心させてあげなさいよ。遊んでばかりいないで、早く子供を作りなさい。」

「女性には、子供を産める年齢が限られているのだから、早めに作らないと後悔するよ。」

と口々にアドバイス?と言うか、説教と言うか?子供の話ばかりされていたそう。

知り合ったばかりの人にまで、

「結婚しているのですか？お子さんは何人いらつしゃるのですか？おいくつなのですか？男の子ですか？女の子ですか？」

と大人イコール結婚している。結婚イコール子供がいるという前提で話をされたらしい。

母は、なかなか子供を授からなかったが、皆からのプレッシャーもある中、ようやく授かった子供を流産で二人亡くしている。その後、授かった姉も、切迫流産などの危機や、産む直前まで絶対安静という不自由と、苦しみを乗り越えてやっと産むことが出来たらしい。その後、なかなか授からない中またも、

「兄弟は？一人っ子は可哀想だよ。」

と再び親切と言う名の謎のプレッシャー。

それでもやつとの思いで授かった赤ちゃんを今度は死産で亡くしてしまった。辛くて悲しくて苦しくて、どうにかなってしまいたいそうだったのに、妊婦のお腹が小さくなったので、

「赤ちゃん生まれたんだね。おめでとう。」

と言われてしまう。我が子を亡くした悲しみというのは、経験してみないと絶対に分からないと思うが、絶対に経験してほしくない事だと母は言う。悲しくて、苦しくて、気が狂いそうになるほど辛い中、死産だった事を知らないからこそ言われるお祝いの言葉。

「おめでとう。」

なんて残酷な言葉なのだろう。

その時母は、悪気は無くても人を傷つける事もあるのだと知ったそうだ。

父の勧めで、気分転換のために通っていたスポーツジムでも、見知らぬ年配の女性に、

「指輪をしているって事は結婚しているんでしょ？こんな所で遊んでないで、早く子供を作りなさい。貴方達若者が子供を産まないから私達の年金が減るのよ！」

と説教をされたそうだ。お節介って怖い。

その後、やつとの思いで悲しみを乗り越え双子を授かる事になるが、喜んだ矢先に、今度は私じゃない方の赤ちゃんを亡くすことになる。妊娠を継続しながら一人失う。流産と死産を経験した母でさえ、初めての経験だった。子供を失った事を悲しむ暇もなく、私を守る事で精一杯だったと言っていた。そんな大変な思いをして産んでくれたのに、私にはあまり実感が無い。ただ、私の人生は私だけのものではないという事だけは忘れないようにしようと思っている。

私達は、無意識のうちに決めつけてしまっている事がある。性別もそうだが、それ以外にも、たくさんあると思う。例えば、大人になったら結婚をするのが当たり前。結婚をしたら子供を産む。子供を一人産めたなら二人目も産める。自分が無事に産めたなら、出産なんて簡単だと思ってしまう。妊婦さんのお腹が小さくなったら当然のように赤ちゃんが元気に生まれたと思ってしまう。でもそれは、勝手な決めつけなのだ。

自分は差別なんて無縁だ。自分は人を傷つけた事なんてない。と思っている人の方が多いと思う。でも実際はそうではないのかもしれない。当たり前で、簡単と思っている事が簡単では無くて、悩んだり苦しんだりしている人がいる事を知って欲しい。子供を産むのは本当に大変な事で、とても尊い事なのだ。子供を亡くしたからこそ分かる命の重さや尊さ。皆、生まれてきてくれてありがとうと心から思う。どんな事があっても、生まれてきた命を大切に生きて欲しいと母は言う。

言葉は無意識でも人を傷つける事があるという事を忘れてはならない。自分の中の無意識の当たり前をもう一度よく考えてから、言葉を選び、使つて欲しい。母も、自分の身に降りかからなければ、そんな大切な事に気が付かないままだったとも言っていた。私も、言葉を慎重に選び、大切に使いたいと思う。

兵庫男女共同参画委員会賞

先輩はLGBT

仁川学院中学校 三年

酒 村 尚 宗

「みんなと一緒にただけどなあ…」そんなありふれた一言をポツリと言った先輩をよく覚えています。僕が通っていた小学校では、年に一回人権講演会の日がありました。毎年、講演してくれる人は、僕の通っている小学校を卒業した先輩方や、小学校に深く関わった方々が話をしてくれることが多く、小学校5年生の時に講演してくれたのは、かなり前に僕と同じ小学校を卒業した人で、「みんなの先輩なんだよ。この学校で6年間勉強して友達と遊んで生活したんだ。」と笑顔で語りかけてくれました。お父さんがよく着ている感じの服装の先輩が「私は男の人、女の人どっちに見える？」と質問をしてきました。「男の人だと思う」とみんな口々に発言しました。ですが、その人は「私は女の人なんです」ときっぱり答えました。訳がわからないみんなに「私は男の人として生まれたけれど、女の人の心を持っています」と言いました。見た目は、メンズの服を着て、かなりの短髪、太く低い声でした。ですが、本当は女性が好むような服が好きで、男性と恋愛をしたいのだと教えてくれました。そこからLGBTという言葉や、その意味をとっても丁寧に教えてくれました。LGBTという言葉ひとつくりでは、表現しきれないほどの心と体が存在して、先輩本人も戸

惑い、悩みながら生活しているのだと知りました。先輩は、心は女性、体や見た目は男性のままでも良いのだそう。テレビに出ているオネエタレントと言われている方々とは、また考え方が違うのとか。それでもみんなの前で話ができるまでには、たくさんさんの苦難を乗り越えてきたらしいのです。自分の考えや感情が周りの友達と違うのだと感じた時のショックや、戸惑い、誰に相談していいのかも分からず、悩み続けた日々を語ってくれました。自分が好きなものを好きと言うと、相手に笑われたり、気持ち悪がられたり、からかわれたりする。なぜみんなと同じように自分の気持ちを正直に言っただけなのかわからないのか？普通ってどういう事なんだろう？そんな先輩の問いかけにみんな自分に置き換えて考えてみるとなんだか辛くなってしまいました。男子がピンク色を好きなのはだめ？女子がガールズアイドルグループを好きなのはだめ？どんどん自分の身の回りに起りうることで答えを見つけようと思いました。男子も女子も友達グループがあつて、毎日遊んでいるのも大好きな友達と言うのも普通だけど、結婚したいと思うのはだめ？なんでだろう？そもそも普通通って誰が決めたん？異性の友達がいたらおかしいの？5年生の僕は悩みます。先輩は、ずっとこんな風に小さい頃から1人で悩んでいたなんて思うと悲しい気持ちになりました。正解ってあるの？勝手に正解決めたらあかんやん。そんな言葉が出てくるとそれは、先輩の心の叫びでもあると気付かされました。

法律は、僕達の生活や主張を守ったり、助けたりしてくれます。生きていく上でとても必要なものでもあります。ですが、LGBTの人権においては、その守ったり、助けたりしてくれる法律が厄介になる場合もあるのです。特に日本はLGBTへの関心は、世界に比べてまだまだ低くもっと認知されていくべき問題であり、開かれていなければならないと感じます。最近では、自治体や企業、学校ごとに、LGBTへの取り組みが進むようになってきました。わずかな決まりが変わるだけでも、悩んでいる人達にしたら希望にもな

るかも知れない。小学校5年生の時に考えた、身の回りで理解する力をつける取り組みは、僕が成長していくのと同じように育っていかないといけないと考えます。個人の些細な取り組みや考えが、やがて大きな輪となり、多くの人の考えに訴えかけて、法律が変わるかもしれません。そのためにも、今中学校で勉強している社会や英語、宗教、多くの教科はその方法を教えてくれて必要なだと感じさせられます。LGBTの先輩がつぶやいた一言「みんなと一緒にだけどなあ…」の意味を改めて心に刻みます。LGBTの人は心から好きな人に好きと言えるように、美しいものを偏見なく、美しいと言えるように、身にまとうるように、誰もがもつと自分らしく言葉を発し、行動ができる日が訪れると願っています。そして他でもなく、5年生の僕達が失礼もあつたであろう発言に、一生懸命うなずいて耳に入れ、思いを伝えてくれた先輩のように、男女関係ない人として、温かい心の持ち主になりたいです。この作文が誰かの心に届きますように。

兵庫こども人権委員会賞

明石駅のホームで会った介助犬とあなたへ

明石市立高丘中学校 二年

森 明咲子

こんにちは。私は明石市に住む中学二年生の女子です。あなたには、小学六年生の冬、明石駅のホームでお会いしました。いや、お会いしたのではなく、私と母が一方的にあなたを見ていただけなのです。あんなに寒いホームで、あなたは補助犬と一緒に電車を待っていましたね。その補助犬は、お腹を冷たいホームの床につけて伏せて待っており、寒くはないだろうかと私も母も心配ですつと見ていました。私は人生で初めて補助犬がお仕事をしている様子を見たので、なんだかドキドキして目が離せなかったのです。

あの時は、なかなか電車が来ませんでしたね。私もまだかなあと不思議に思っていました。

すると、電車が遅れているため乗り場が変わるというアナウンスがホームに流れてきました。周囲の人たちは、アナウンスされたホームに次々と移動して行っただけで、あなたはそれに気付かず、ずっと電車を待っていましたね。私たちは、あなたに声をかけようかどうか迷いました。補助犬がお仕事をしている間は、集中力が途切れるため、あまり声をかけてはいけないということを聞いていたので、どうすれば良いか分からなかったのです。私と母は迷いながら、ホームと改札の間の階段を二往復くらいしながら、あなたに声をか

けるかかけないか、ずっと悩んでいました。そんなことをしている間に、あなたは電光掲示板を見て電車が遅れていることに気がつき、どこかに移動して行つたので、私たちはホッとしました。

ですが、私たちはあの時、どうすれば良かったのでしょうか。アナウンスがかかった時に、あなたに筆談などを使って教えてあげれば良かったのですか。私たちは結局何もできず、声をかけられないままでした。このことが、ずっと気になっており、

「あのホームの人とワンちゃん、ちゃんと電車に乗れたのかな」と、今でも母と思います。

本当は、あなたに大して何もできなかったことを、去年の人権作文で書くこうしていました。でも、どう書いたら良いのか、結局答えが見つからず、書くことができませんでした。

きっとあなたにもう一度会って、あの時どうすべきだったか教えてもらうことは、難しいと思います。そこで、私は、人を助ける仕事をする犬について調べ、聴導犬や盲導犬のことを学び、これから私はどう行動すべきかについて答えを見つけることにしました。

厚生労働省のリーフレットによれば、目や耳、手足に障害のある方をサポートする「盲導犬」「介助犬」「聴導犬」のことを「ほじょ犬」というそうです。補助犬は、障害のある方が自立した日常を送るためのパートナーであり、しっかり訓練されているので、社会のマナーをきちんと守り清潔にしています。

そして、ユーザーは補助犬と様々な交通機関や公共施設を利用します。補助犬にとって、ユーザーの指示はとても大切なため、周囲の人が補助犬に対して「可愛い!」「えらいね」などと話しかけたり、近くでじつと見つめたり触ったりすることははいけません。

補助犬は、公共交通機関や飲食店等を汚さないよう、足元に静かに待機しています。そして、補助犬への接し方として守らなくてはいけないのは、「食べ物を与えない」、「気を引く行為は避ける」、「温かく見守る」ということです。

私が驚いたのは、補助犬が入ってくるのを拒否する飲食店等の施設があるということです。受け入れる施設側は、補助犬法に基づき、補助犬の同伴を受け入れる義務があります。しっかりと訓練を受け、適切に衛生管理された補助犬を拒む理由はどこにあるのでしょうか。

そう言えば、以前、テレビでコマーシャルを見たことがあります。どこでも一緒、と仲良く楽しそうに歩いていくユーザーと補助犬が、あるお店に入ろうとすると、ボタンと目前でドアを閉められる、というものでした。このコマーシャルを見た当時は、よく意味がわからなかったのですが、今回補助犬のことを調べて、やっと理解できたように思えます。

私はこれから、補助犬と一緒にいる人がいたら、まずはそつと見守ります。そして、何か困っている様子に見えたり、緊急事態が起きたりした時は、補助犬をびつくりさせないように、何か手伝うことはないかその場で考え、手助けをしたいと思います。

「何かお手伝いしましょうか？」

これから、あなたにもう一度会える機会はないかもしれません。でも、いつか誰かに言えるように、私はこの言葉を心の中で練習しています。

兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞

老若男女 社会の一員として

西宮市立瓦木中学校 三年

星 川 百 寧

私の祖母はとても活発で行動力のある人だ。地域の様々な活動にボランティアで参加したり、高齢者から声がかかれば、昼夜問わず駆けつけて相談にのったりしていた。祖母は私から見れば、70才を過ぎた立派なおばあちゃんなのに、本人は自分をおばあちゃんとは全く思わず、「この前地域の高齢者給食サービス」とき、来られたおばあちゃんがね…」と話をしてくれる。私は祖母が自分の歳をさしおいて、そんなに自分と歳の変わらない相手の方を「おばあちゃん」と呼んでいるのがおもしろいと思い、同時に気が若くていいなあと思っていた。

そんな祖母が脳出血で倒れた。倒れる前日までの祖母とは全てが変わってしまった。命は助かったものの、手足に麻痺が残り、歩けるようになるのも難しいでしょうとお医者さんに告げられた。今までたくさんの人のお世話をして生き生きとしていた祖母が、目覚めたらお世話をされる側になってしまうことを本人が知ったらどう思うのだろうと想像しただけで私は胸がぎゅっとしめつけられるような悲しい気持ちになった。

しかし意外にも祖母は自分の状況をすんなり受け入れた。その反応を見て私は拍子抜けだったが、心の底からほっとした。それまで祖母は体が不自由な中でも自分らしい暮らしを過ごしている先輩方を近くで見ているので、自分の置かれた状況も特別なこととは思わなかったということなのだ。そのことを聞いたとき、祖母は今までボランティアで地域の高齢の方々と接するときに、世話をしてあげているような上からの目線ではなくフラットな心で対等な人間関係として接していたのだと思った。祖母には「支える側」「支えられる側」という垣根がなかったから、今までとは逆の、お世話をされる必要がある状況になるのも抵抗なく受け入れられたのだないかと思った。

このことを改めて考えさせられる出来事があった。先日混雑した電車に乗っていたら、大きいおなかの妊婦さんが、立っていた私の横に入ってきた。前方の座席には杖を持ったおばあさん、スマホに必死な若者、読書をしているサラリーマン、居眠りの人などで座席は埋まっていた。妊婦さんが立っているのは辛いだろうなあと思うていたとき、杖を持ったおばあさんが立ち上がり、「未来の宝物ね。大切にしなさいね。」と妊婦さんに座るように促した。するとそのことに気がついた座っていた人たちが「いえ、私が。僕が。」と次々と立った。結局妊婦さんは無事座ることができ、おばあさんはもうすぐ降りるからと違う場所へ移動し、混雑している車内で3席ほどが空席という不思議な状態となった。でもそのやさしさの詰まった空席の緑のシートが日を浴びてぽかぽかの芝生のように温かい雰囲気包まれた。おばあさんに続いて席を譲った周りにいた人たちも決して無関心なわけではなかった。きっかけさえあれば助けたいという優しい気持ちを持った人であふれていると感じられる心温まるできごとだった。しかし私ははじめおばあさんが席を譲ったとき、「まさか!」と思った。あの場で席を譲るべきなのはその横に座る若者やサラリーマン

たちだと思っていた。私は勝手に足が不自由なおばあさんは譲られる側の人だと決めつけていたのだ。おばあさんは自分のできる中で、自分の意思で妊婦さんに声をかけた。よく考えてみれば自然なことなのに、その行為に驚いてしまった。私は完全にフラットな気持ちで見ることができない自分に改めて気づかされたと同時にそのおばあさんに私の祖母が重なって見えた。「してあげる側」「してもらう側」ということはない、みんなの自然な行動に助けられる人がいる。このようなことが広がればいいなと思った。

でも今の私自身は人助けやボランティアというハードルが高く感じてしまうところがある。「いい人ぶっている？」など周りの目が気になるという気持ちの方が正直少しある。例えば今回のように電車で座席が必要だと思われる人に席を譲るという簡単なことでさえ、実際に声を掛けるのには勇気がある。意識はしていないつもりでもその行為に対して「してあげる」という気持ちが隠れているからなのかもしれないと思った。でもひとりの人と人とのフラットな関係の中での助け合いと思えば、もう少し気軽に行動できるのではないかということを今回の祖母のことと電車での出来事を通して教えてもらった。

祖母は持ち前の気力で辛いであろう長期間のリハビリを経て、杖は必要だけれど一人で歩けるまでになった。まだもう少し時間はかかるけれど、また祖母が以前のように地域の人たちと交流を持ちながら生き生きと過ごせるようになるよう私は祖母のことを応援したいと思っている。そして私も日々の生活の中で自分にできることがあればフラットな心で行動にうつしたいと思う。

「私の暮らし」

丹波市立青垣中学校 三年

野 田 姫 華

皆さんは毎日、家族と暮らしていて、幸せだと感じたことはありませんか？ほとんどの人は、それは当たり前のことと、毎日幸せだと感じているかどうかは、意識しているかどうかの違いくらいだと思います。家族と一緒にご飯を食べたり、出かけたり、笑ったりと毎日、家族と暮らしている人が多くいます。ですが、私はそのような幸せを感じることはできません。なぜなら、私は家族と長い間会っていないからです。私と同じように家族と会えず、たくさんの子供たちが児童養護施設へと預けられています。児童養護施設とは、保護者がいない子供や、様々な理由で保護者と暮らすことができない子供を養護するところです。

私が児童養護施設「睦の家」に暮らすようになったのは、四歳の頃でした。児童養護施設に暮らす前は、兄二人、姉二人、弟一人、私と両親の計八人の大家族でも幸せに暮らしていました。ところが、私が一歳の頃に母が重い病気にかかってから、父一人で会社に行けず、母の看病をしながら、五人の子供を育てていました。ですが、育てることには限界があり、まだ幼い私と弟は睦の家という児童養護施設に預けられました。十年前のことなので、私には家族との記憶がほとんどありません。

「睦の家」に住むようになった最初の頃、家族に会いたくて、不安ばかりでたくさんの子供たちと同じように、ずっと泣いていました。いつか迎えに来てくれると思い、ずっと窓から外を眺めたり、時には外に飛び出したりしたこともありました。そういうとき、施設の先生方は母親のように接してくれました。どんな時でも側にいてくれました。揺れ動く心をしっかりと受け止めてもらい、その時、その時を乗り越えていくことができました。簡単な言葉ですが、嬉しかったです。私はこうして今は安心して暮らすことができます。睦の家に暮らしている、他の子と仲良くなり、遊んだり、時には喧嘩もしますが、とても楽しく過ごすことができます。

そんな中、私が小学四年生の時に同級生の子に

「睦っていいな。親がいないから親と喧嘩せずに済むし、私も住みたい。」

と言われたことがありました。私は周りからそんな風に思われていたのかと、とてもびっくりしました。「好きで施設で暮らしていないのに……家族から離れるという気持ちを分かっているじゃない！」と思いました。でも、周りから見れば、自分と同じように学校に通い、勉強道具もそろえられ、お茶やお弁当を持たせてもらい、何不自由なく暮らしているように見える私たちを、そんな風に思われても当然だなあと、今は思います。それでも、心のどこかで睦の家で生活する私たちのことをちゃんと知ってほしいと思っています。

そんな中、一学期の終わりに野村恵子先生のお話を伺いました。今まで「睦っていいよなあ。私も住みたい。」と言われるたび、みんなは養護施設の子の気持ちを分かってくれないと思っていました。しかし、野村先生の講演会で「自分を生んでくれてありがとう」と母へ感謝の気持ちでいっぱいになりました。

母は私が六歳の頃に亡くなっています。私はずっと「私が生まれたから、母が亡くなってしまった」と思い、

ずっと自分のことが嫌いでした。しかし、施設の先生方はその心を癒やし、私だけではなく、傷ついたり
んな子どもたちに、親のように接してくれ、いつの間にかみんな家族のように思うことができました。そして、
周囲が養護施設のことを理解してくれない……のではなく、私が、理解してもらえないように一生懸命頑張ろ
うと思うようになりました。中学三年生、進路を見つめ、自分ができることを探していきたいです。今まで
育ててくださった睦の先生に感謝しています。そして、天国にいる母に「いつも頑張っているね!」と見守っ
てほしいです。

兵庫県大会優秀賞

弟から学んだこと

近畿大学附属豊岡中学校 一年

辻井透真

皆さんは、「難発性吃音」という言葉を知っていますか？

一般的には「吃音」とか、「ドモリ」とも言われ、言葉を発する時に、最初の一音目がうまく出てこない症状や、同じ言葉を連発して繰り返す症状があります。

僕の弟は、五才の頃からこの吃音の症状があります。僕達家族は、弟が話をする時は、ゆっくり聞いたり、言葉が出るまで待つようにしています。弟自身も、小学校に入った頃は、時々自分の話したい事がうまく口に出せないんだと、言っていました。そんなに気にする様子もなく、授業中もよく発言し、友達ともいい関係でした。

しかし、小学三年生のある日、学校から泣いて帰ってきました。吃音のことで、友達にからかわれ、話の方のまねをされたのでした。弟は、自分がどうしてうまく言葉が出ないのか、どうやったら治るのかと、母に聞いていました。

母は、弟と僕に大事な話があると言って、一本の動画を見せてくれました。それは、弟と同じ吃音症の九

才の男の子のドキュメンタリー動画でした。僕は、弟以外で吃音症の人を見るのは初めてでした。そして、弟が「吃音症」という名前の特性を持っていて、治ることは難しいということを知りました。僕は、（きつと弟も）とてもショックだったけれど、この動画を見て、吃音症の人は他にも沢山いて、だいたい百人に一人くらいの割合でいることを知りました。一番驚いた事は、その男の子が、周囲の人に、自分の吃音のことをお願いしたいことを紙にまとめて、発信し、理解を求めていたことです。動画を見たあと、母は「誰にだって苦手なことはある。この世の中にはいろんな人がいて、人と人が支え合って生きている。自分と違う人がいても、相手のことを理解して認める姿勢を持つことが大切なんだよ。」と教えてくれました。

弟は、担任の先生と相談して、僕も動画の男の子のように、自分が吃音症であることや、困っていること、お願いしたいことを発表したいと言いつちました。内容は吃音症という特性があるからうまく話ができないこと。ゆっくり話を聞いてほしいこと。そして吃音症の人はこの世界で沢山いるのだということでした。僕はすごいと思いました。とても勇気があることです。でも弟はやってのけたのです。僕だったら、授業中に手を挙げられなくなっただけかもしれません。みんなと話をするのも、からかわれるのが嫌で、黙っていたかもしれません。

弟の発表のあと、クラスメイトからの感想を先生がまとめて、家に持ってきてくれました。その中には、「弟のことを「応援したい」、「吃音症を初めて知って、だからうまく話せなかったんだとわかった」、「吃音なのにいつも授業中に堂々と発言していてすごいと思った」「言葉に詰まっている時は、心の中で頑張れと応援しているよ」、「目が見えなかったり、耳が聞こえない人がいるように、吃音の人もあるんだと知った」などの意見がありました。そして、それ以降は、弟のことをからかったりする人は、いなくなりました。弟も、

発表の時はとても緊張したけれど、言ったあとは、ようやく分かってもらえたと感じて、心がスッキリしたと言っていました。

僕はこの弟の行動から、大切なことを学びました。誰だって苦手なことはあるけれど、そのことを隠したり、マイナスに思う必要はなく、まず、それも自分自身なんだと認めることが大切なのです。また、相手の苦手なことやできないことを攻撃したり、自分と違うからと拒絶するのではなく、分かろうとすることが人権を守ることに繋がるのではないかと思います。

人権の正しい在り方

尼崎市立立花中学校 二年

堀岡 青矢

僕は小学校3年生から小学校6年生の卒業まで髪の毛を伸ばしていました。その理由はヘアドネーションをしていたからです。私の叔母が髪の毛を伸ばして、小児がんなどの病気で髪の毛がない、あるいは髪の毛がなくなる人達に、髪の毛を寄付するヘアドネーションという活動をしていることを聞いて、それにあこがれた自分がいたからだと思います。話を聞いてからすぐ母の許可を得て、その日から髪を切らないことを決めました。

父は最初、反対していたけれど、「病氣の人に寄付するのだから。」と説得しました。小学校3年生の初めごろにあった家庭訪問で先生の理解は得ていたのですが、髪が伸びてきたころ、周囲の友達から「女の子みたい。」や「清潔感がない」、「なんで男の子なのに髪の毛を伸ばすの？気持ち悪いよ？」などと言われたことを今でも覚えています。このようなことを言われることは、髪を伸ばすことを決めた時点で予想していたけれど、あまりに単刀直入だったので、かなりショックでした。それから4年生の初めごろまでずっと言われ続け、とうとう髪を伸ばすことが恥ずかしくなってきました。何回も髪を切ろうと思ったけれど、こんな

ところで折れる方が恥ずかしいなと感じ、最後までやりきろうと思いました。それとどこで誰に言われたのか忘れたけれど、「気にしたら負け。」という言葉を通じて伸ばし続けました。結局卒業まで周囲からいろいろ言われたけれど、あまり気にしていませんでした。

自分の髪を使う人のことを考えて、毎日お風呂に1時間半ほど入って髪をケアし、髪が痛まないように毎日うつぶせになって寝ることを意識しました。6年生の時は、誰よりも髪質がよかった自信があります。ヘアドネーションができる最低の長さが15cmなのですが、カットに行ったとき測ってもらうと、36cmもあり、その時は達成感と誇りで満面の笑みを浮かべたのを覚えています。

この活動を通じて感じたことがあります。「男の子なのに」「女の子みたい」とよく言われ、道を尋ねられた時、性別を間違えられることもありました。とても嫌な思いをしました。病気などで髪の毛を失った人が外見を気にしないようにするための取組なのに、なぜ協力している人が外見で嫌な思いをしなければいけないのかと思いました。でも、ボランティアだと思って頑張りました。バッジをつければヘアドネーションのために長髪にしていることをわかってもらえることは知っていました。でも長髪を理由をなぜ理解してもらわなければいけないのか、性別関係なく自分の自由に服を着たり、髪形を選んだりしたらいいと思い、バッジをつけませんでした。

「男の子らしく」などの、性別にとらわれない世の中になると、ヘアドネーションの活動に参加する人が増えると思います。最後には髪の毛を失っても周りの目を気にせずに生きていける世の中になることが、人権が守られている本来の理想的な姿ではないかと感じました。

ぼくの障がいと友達

洲本市立洲浜中学校 一年

堂 内 渉 夢

ぼくはディスレクシアという障がいがあります。書字読字障害とも言われる障がいですが、文字の形の認識が弱く、読んだり書いたりすることに時間がかかったり、がんばって漢字を覚えようとしても、なかなか覚えられない障がいです。ぼくの場合は読むことも苦手だけど、それよりも漢字を書くことが一番難しいです。

小学生のころから漢字を書くのが遅かったり、漢字を何回書いても覚えられなかったり、高学年になっても句読点を忘れてしまったりして、病院で検査をしてもらって、この障がいがあることがわかりました。

ぼくは、そんな障がいがあることも知らなかったけれど、漢字を書くのがとても苦手で時間がかかるし嫌いで、小学生の時、友達と一緒に漢字練習帳の宿題をしていて「なんでみんなそんなに早く書けるのだろう」「なんでそんなにすぐに覚えられるのだろう」ときもんに思っていました。ぼくは時間がかかって漢字の宿題をサボったこともないし、みんなと同じようにきちんとやっていました。それでも全然早く書けるようにならないし、覚えられないのは自分がばかだからと思っていました。だけど、そういう障がいなんだよと聞かされて、自分は障がいがあったのかと、少しショックでした。

だから友達には障がいのことを言えませんでした。友達とは小学生の時からずっと一緒に、中学になって新しい友達もたくさんできました。「みんなは、ぼくの障がいのことを知ったらどう思うだろう」、「もしかしたら嫌われてしまうかもしれない」と不安でした。そんなことを考えるとすごく怖くなりました。

でも中学になって、ぼくはテストの時に障がいの配慮で、一人だけ別の教室でテストを受けさせてもらったりするようになるから、友達にもその理由を説明しないといけないタイミングが来てしまいました。病院の心理士さんや親や先生からも、この先もずっと隠しながら生活するのは大変だし苦しいし、周囲の人たちに理解してもらうことも大切だと言われました。

だから、初めての中間テストの前に担任の先生から、クラスみんなにぼくの障がいのことを説明してもらうことになりました。その日は、テストの緊張と、みんなに自分のことを知られる不安でドキドキしました。だけど、友達はその話を聞いても「大丈夫か？」とすごく心配してくれて、いつも通りにおもしろい冗談を言って話しかけてきてくれて、何も変わらずに接してくれています。

ぼくの友達は、偏見を持たずぼくの人権を尊重してくれました。本当に優しくていい友達ばかりです。先生たちもぼくが困っていないか気にしてくれて、サポートをしてくれます。障がいがあるけれど、周りの人たちに支えられて助けられてぼくは毎日、みんなと同じクラスで学べて学校生活がおくれています。だから、ぼくも周りの人たちに対して、自分がみんなからしてもらっているように相手を尊重して、理解し、困っている人がいたら助ける気持ちを大切にしていけます。

【奨励賞】 25 編

作 品 名	学 校 名	学年	氏 名
そばにいてくれるだけで	神戸市立平野中学校	1	松田 葵
同じフィールドに立つ	神戸市立有野北中学校	1	伊藤 遼
色眼鏡を外して	神戸市立岩岡中学校	3	安福心晴
生きづらさという名の個性	西宮市立甲陵中学校	3	高木啓汰
小さな勇氣	伊丹市立東中学校	3	佐冨明莉
私のお兄ちゃん	宝塚市立宝塚中学校	3	杉本姫菜
発達障害の姉と僕	川西市立緑台中学校	1	速水悠馬
バリアフリー化を進めるにあたって	三田市立富士中学校	3	阪本慎之介
不機嫌が消えたこと	尼崎市立大庄中学校	3	高木康聖
周りの支えあってこそ	明石市立大久保中学校	3	藤田和奏
多様性の中にある私	丹波市立氷上中学校	2	足立美樹
心の中の偏見	丹波市立市島中学校	3	荻野聡真
障害をもった今	姫路市立朝日中学校	1	岩田紗空
「これくらい」を許さない	姫路市立朝日中学校	2	平野琴葉
今の私がある理由	兵庫県立姫路聴覚特別支援学校	3	小川舞結
子どもたちの居場所	加古川市立山手中学校	非公表希望	
知ってほしい！障害者の職場	加古川市立加古川中学校	2	松下 栞
みんなの英雄	兵庫教育大学附属中学校	3	高見茉央
みんなおんなじ人間だから	加西市立加西中学校	1	三村奈々
言葉の二面性による人権侵害	赤穂市立赤穂中学校	1	夫津木万彩
手話との出会い	佐用町立上月中学校	3	坂井桃禾
「戦争は最大の人権侵害」	相生市立矢野川中学校	2	大崎秀真
「誰かの支えになりたい」	新温泉町立夢が丘中学校	3	長谷川栞帆
人生を変えてくれたきっかけ	淡路市立津名中学校	3	中野ひなた
「障害」について思うこと	洲本市立五色中学校	1	大和真一郎

Kids Room

(法務省きっずるーむ)



こどもの人権 SOS-eメール

https://www.jinken.go.jp/soudan/PC_CH/0101.html



こどもの 人権110番

<https://www.moj.go.jp/KIDS/jinken110/>



人権擁護局の LINE

アカウント
@JINKEN01



人権擁護局の フェイスブック

<https://www.facebook.com/HumanRightsBureau.MOJ/>



人権擁護局の X

アカウント
@MOJ_JINKEN



人権擁護局の フロントページ

<https://www.moj.go.jp/JINKEN>





ひとりで悩まず相談してください

LINE じんけん相談 @法務局

相談時間 月曜日～金曜日（祝日・年末年始を除く）
午前8時30分～午後5時15分

対象者 大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、
和歌山県にお住まいの方

相談方法 友だち登録してご相談を！
相談が集中した場合は、対応できない場合があります。
改めて相談するか、電話又はメールによる相談窓口を
ご利用ください。



LINEで
相談できるよ



秘密は
まもるよ

人権イメージキャラクター
人KENまる君 人KENあゆみちゃん

LINEのほかに、電話やメールでも相談することができます

こどもの人権110番（通話無料）

☎ 0120-007-110

相談

時間

月曜日～金曜日（祝日・年末年始を除く）

午前8時30分～午後5時15分



こどもの人権

SOS-eメール

<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

インターネット人権相談

検索



大阪法務局・大阪府人権擁護委員連合会

❖ 人権問題のご相談はお近くの法務局・人権擁護委員へ ❖

相談は無料で、秘密は固く守られます。

❖ 常設相談所

- ☐ 神戸地方方法務局人権擁護課・神戸人権擁護委員協議会
〒650-0042 神戸市中央区波止場町1番1号 Tel 078-392-1821
- ☐ 神戸地方方法務局西宮支局・西宮人権擁護委員協議会
〒662-0942 西宮市浜町7番35号 Tel 0798-26-1302
- ☐ 神戸地方方法務局伊丹支局・伊丹人権擁護委員協議会
〒664-0881 伊丹市昆陽1丁目1番地12 Tel 072-779-3454
- ☐ 神戸地方方法務局尼崎支局・尼崎人権擁護委員協議会
〒660-0892 尼崎市東難波町4丁目18番36号 Tel 06-6482-7417
- ☐ 神戸地方方法務局明石支局・明石人権擁護委員協議会
〒673-0891 明石市大明石町2丁目4番25号 Tel 078-912-5564
- ☐ 神戸地方方法務局柏原支局・柏原人権擁護委員協議会
〒669-3309 丹波市柏原町柏原516番地1 Tel 0795-72-0176
- ☐ 神戸地方方法務局姫路支局・姫路人権擁護委員協議会
〒670-0947 姫路市北条1丁目250番地 Tel 079-225-1926
- ☐ 神戸地方方法務局加古川支局・加古川人権擁護委員協議会
〒675-0017 加古川市野口町良野1749番地 Tel 079-424-3555
- ☐ 神戸地方方法務局社支局・北播人権擁護委員協議会
〒673-1431 加東市社539番地2 Tel 0795-42-0201
- ☐ 神戸地方方法務局龍野支局・龍野人権擁護委員協議会
〒679-4167 たつの市龍野町富永879番地2 Tel 0791-63-3270
- ☐ 神戸地方方法務局豊岡支局・豊岡人権擁護委員協議会
〒668-0024 豊岡市寿町8番4号 Tel 0796-22-2703
- ☐ 神戸地方方法務局洲本支局・洲本人権擁護委員協議会
〒656-0024 洲本市山手1丁目2番19号 Tel 0799-22-0497

相談時間はいずれも月曜日～金曜日（休日を除く）午前8時30分～午後5時15分まで

❖ 特設相談所

市役所や町役場で開設しています。
日時などはお近くの法務局におたずねください。

❖ 外国語人権相談ダイヤル



0570-090911

月～金曜日（休日を除く） 午前9時～午後5時まで
対応言語 中国語、韓国語、英語、フィリピン語、
ポルトガル語、ベトナム語、ネパール語、スペイン語、
インドネシア語、タイ語

発行 令和6年2月1日

発行所 神戸市中央区波止場町1番1号
神戸地方法務局 兵庫県人権擁護委員連合会
TEL078(392)-1821(代) FAX078(392)-0180

印刷所 〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9
株式会社 旭成社

禁転載

この作品集の作品を地方公共団体が広報誌に掲載したり、
学校が教材に使用される場合は、神戸地方法務局人権擁護課
(078-392-1821代表)まで、連絡してください。



人権イメージキャラクター
「人KENまわる君」
「人KENあゆみちゃん」

ひとりで悩まずにご相談ください

人権に関する問題でお悩みの方は、
お近くの法務局・地方法務局又はその支局までご相談ください。



電話でのご相談（平日 8：30～17：15）

みんなの人権110番

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方法務局につながります。

※ PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

こどもの人権110番（通話料無料）

いじめ、虐待など、こどもの人権問題に関する専用相談電話です。

女性の人権ホットライン

配偶者・パートナーからの暴力やセクシュアル・ハラスメント等、女性の人権問題に関する専用相談電話です。

※PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

みんなの人権110番

ゼロゼロみんなの りゃくとおぼん

 **0570-003-110**

こどもの人権110番(通話料無料)

ゼロゼロなな の りゃくとおぼん

 **0120-007-110**

女性の人権ホットライン

ゼロナナゼロ の ハートライン

 **0570-070-810**



インターネットでのご相談

インターネット人権相談受付窓口URL

<https://www.jinken.go.jp/>

PC、携帯、スマホ共通です。 **インターネット人権相談**

検索



LINE じんけん相談

LINEでも相談を受け付けています

@snsjinkensoudan

検索

こちらから友だち追加してください▶

